様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２９３５

研究課題名（和文）中近世正教世界における軍事聖者崇敬の実相

研究課題名（英文）The reality of the military saints' veneration a in the medieval and pre-modern orthodoxy world

研究代表者
根津　由喜夫（Nezu, Yukio）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：５０２０２２４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中世、ビザンツ帝国に成立した軍事聖者崇敬が周辺のスラヴ・東欧世界に伝播し、その地に定着し、独自の発展をしてゆく過程を分析し、地域ごとに生まれた特性を比較、検証した。特に注目したのは、テサロニケの聖デメトリオス信仰がブルガリア、セルビアで受容されるプロセスである。こうした課題を究明するため、文献調査と並んで、両国の教会や修道院などに残された壁画などの現地調査も実施し、それらの地域でビザンツに由来する軍事聖者が現地の守護聖人として定着してゆく過程が確認された。

研究成果の概要（英文）：In this study, the process in which military saints’ veneration established in Byzantine Empire in the Middle Ages was spread in the neighboring Slavs-Eastern World, settled in those countries and developed in original evolution was analyzed and the characteristics born in each area were compared and inspected. We payed special attention the process by which St. Demetrios of Thessalonike cult was accepted at Bulgaria and Serbia. To study such a problem, along with documents investigation, we carried out the field works on the frescos of churches and the monasteries in the two countries and confirmed the process by which a military saint from Byzantium was settling as a local patron saint in those areas.

研究分野：西洋史

キーワード：ビザンツ　東方正教　軍事聖者

１．研究開始当初の背景

本研究の出発点は、過去の科研費に基づいて実施された東地中海沿岸部・バルカン地域での現地調査において得られた複数の体験に発している。応募者は、先にビザンツ中期においてビザンツ中央権力の主導下に設立された修道院が周辺地域に及ぼした政治的・文化的影響を考察した研究（平成 24 年度～平成 26 年度　科研費・基盤Ｃ）の調査のため、ギリシアやバルカン半島の各地を訪ねる機会があったが、多くの場所で、ビザンツの帝都コンスタンティノープルに所在した有名な教会に由来する名を帯びた教会と遭遇した。たとえば、聖ソフィアの名を冠した聖堂は、テサロニケやペロポネソス半島のミストラとモネンヴァシア、ブルガリアのソフィア、そしてウクライナのキエフ、さらに南イタリアのベネヴェントなど、ビザンツの版図内に限らず、その文化的影響が及んだ南イタリアや東欧・ロシア地域でも確認されている。同様に、コンスタンティノープルの金角湾奥に位置し、聖母の衣を蔵したことで名高かったブラケルナエ教会の名を冠した教会施設も、ギリシア北西部のアルタ、ペロポネソス半島北西部キリニ近郊、アルバニアのベラティなどに現存している。これらが帝都の同名の教会がもつ霊験にあやかろうとしていたのは明白であろう。ルーマニア北東部モルダヴィア地方のモルドヴィッツァ修道院（16 世紀前半の創建）の外壁には、626 年のササン朝ペルシア軍によるコンスタンティノープル攻囲戦の模様を描いた有名な壁画が残されている。当時のモルダヴィアは、オスマン朝の脅威にさらされていたため、聖母の加護によって東方の大軍を撃退した 7 世紀コンスタンティノープルの奇蹟を再現したいという願いがこの壁画には込められていたと考えられる。中世後期から近世にかけてバルカン東欧地域で崇敬を集めた聖デメトリオス（ロシアでは「ディミトリー」）に関しても、中世初頭にアヴァール人やスラヴ人の襲撃からテサロニケの町を防衛した都市の守護者としての聖者の役割が人々の関心を引きつけた最大の要因であったに違いない。外敵の脅威に直面した当時の人々にとって、こうした聖母や聖者は、国土と我が身を守ってくれる心の拠り所であり、為政者にとっては防衛戦争に国民を結集させる愛国のシンボルたり得たことは容易に想像できる。

ただ、いささか疑問に感じるのは、こうした聖母・聖者崇敬がバルカン東欧地域で定着するのは、オスマン朝の圧迫でビザンツ帝国の衰亡が顕著になりつつあった中世後期以降である点である。モルダヴィアでコンスタンティノープル攻囲戦の壁画が描かれた時期には、すでにコンスタンティノープルの町はトルコ人によって陥落している。ビザンツ帝国がトルコ人に滅ぼされた後も、ビザンツに由来する救国の宗教的シンボルにすがろうとしているバルカン東欧地域の人々の心情はどのように理解すべきだろうか。おそらくそこには、こうした宗教的なシンボルをビザンツからの単なる借りものとしてではなく、自らの祖国防衛のシンボルとして内在化しようとするそれぞれの地域の人々の情念があったのだろう。本研究で究明を目指すのは、まさしくそうした地域ごとの聖母・聖者崇敬の受容と確立のプロセスである。

２．研究の目的

本研究の目的は、中世、ビザンツ帝国に成立した軍事聖者崇敬が周辺のスラヴ・東欧世界に伝播し、その地に定着し、独自の発展をしてゆく過程を分析し、地域ごとの特性を比較、検証することにある。これらの地域では、中世後半から近世初頭にかけて、モンゴルやオスマン・トルコの脅威にさらされており、国土防衛の戦いに国民を結集させるための精神的シンボルが必要とされていた。中世後期、オスマン・トルコの攻勢を前になすすべもなく滅亡したビザンツ帝国に由来する宗教的シンボルが、なぜ、その後も東欧諸国で国民を鼓舞する救国のアイコンとして繰り返し活用されたのか、という疑問に対する回答もそこから得られることが期待される。

３．研究の方法

本研究においては、ビザンツ本国から東欧・正教圏各地の伝播した聖母・聖者崇敬の実態を検証するために、文献調査と現地調査を並行的に推進することを計画している。第 1 に、考察の対象となる地域において、地域防衛の精神的支柱となった教会・宗教施設に対して、創建時の歴史的背景や後援者である世俗権力との関係を究明し、堂内の壁画や銘文などを読み解くことで当該施設が現地社会において果たした社会的・精神的機能を解明することに努める計画である。こうした作業では、現地以外では取得困難な文献や史料の収集と分析も不可欠であり、また、こうした聖者崇敬が現地社会に定着していった状況を把握するために、現地に残る伝承やフォルクローレの類も積極的に収集を図り、それを歴史的文脈の中に位置づける作業を行いたいと考えている。

４．研究成果

(1) 平成 27 年度

本年度は、8 月 13 日－30 日にかけてアルバニア、マケドニア、ギリシアにおいて調査活動を実施した。アルバニアではコルチェ市内の中世教会、プレスパ湖畔のマリグラッド教会を訪ねている。ギリシアでは、プレスパ湖の島に点在する中世教会の史蹟、カストリア、ヴェリア、テサロニケ市街の中世教会や史蹟を歴訪し、同時に研究文献の収集にも従

事した。マケドニアにおいてもストルミツァとスコピエを拠点として周囲に所在する教会や修道院への調査を精力的に実施することができた。今回の調査においては、聖デメトリオス信仰の中心であるテサロニケからその文化的影響圏であるカストリアやヴェリア、さらにその外縁部に広がる現マケドニア共和国内の教会その他の史蹟を包括的に調査したことで、中世後期のバルカン地域の文化的伝播と国際関係の変動の状況をよりよく理解することが可能になったように思われる。

そのほかの活動としては、服部良久編『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史』（ミネルヴァ書房、2015 年）の第 6 章「都を血で穢すのは誰か―ビザンツ中期における権力闘争の作法―」（129－149）を執筆したことに加え、早稲田大学で 3 月に開催された「中世カッパドキア研究集会」における成果報告論集に論文 "Fall of the Last Cappadocian Hero: Revising the Complot of Nikephoros Diogenes"を寄稿した（受領済み。ただし刊行時期は現時点では未確定）。

(2) 平成 28 年度

本年度は、夏季休暇を利用してブルガリアに調査旅行を実施し、第２ブルガリア王国に関連した史跡や博物館等にて現地調査と資料収集に尽力した。とりわけ王国の都が置かれた現在のヴェリコ・タルノヴォ、第１王国時代の故地であるシューメンやリラ修道院などにおいてはデータ収集に大いに収穫が得られた。ブルガリア国内の修道院で最高の格式を誇る「リラの修道院」に伝存している図像に関する考察を行った。それは、騎兵姿の聖デメトリオスが、地面に倒れた敵を馬上から槍で攻撃している構図であり、その敵には「カロヤン」という説明書きが付されている。ブルガリア国内でブルガリア王を刺殺する聖者の像が保存されているのは明らかに奇異なことであり、これには何らかの説明が必要である。現時点では、リラの修道院がブルガリアの西部に位置し、北中部のタルノヴォ王権から相対的に自立的な地位を保っていたことがこの謎を解く鍵となるのではないかと推測している。14 世紀中葉において、同修道院の最大のパトロンとなった現地の君侯が、セルビアの支持を得て、半ば独立した地位を得ていたことも、同修道院の反タルノヴォ王権的な姿勢を助長させた可能性がある。この図像の解釈を通じて、これまで明らかにされていなかった、当時のバルカン地域の複雑な政治情勢の現実に光が当てられることが期待されるのである。こうした今年度の研究成果の一部は、3 月に大阪市立大学で開催された日本ビザンツ学会第 15 回大会において報告された。また、これとは別にミネルヴァ書房から刊行予定の「グローバル世界史」においても分担執筆を行っており、現在、出版に向けて準備中である。

聖デメトリオス教会
（ヴェリコ・タルノヴォ、ブルガリア）

(3) 平成 29 年度

今年度は、コソヴォ地区に位置しているペーチ総主教座聖堂とデチャニ聖堂を中心に調査を実施した。ペーチ総主教座聖堂では、14 世紀前半に当時の大主教の肝煎りで聖デメトリオス教会とホデゲトリアの聖母教会が相次いで建立されている。当時、ビザンツとセルビア王国の間では、ビザンツ皇女の降嫁が実現するなど君主家門間の活発な交流が確認されるため、こうした一連の建設活動は、積極的にビザンツの洗練された文化を受け入れようとするセルビア側の姿勢を読み取ることができるように思われる。これに加え、セルビア王の後援で建立されたデチャニ聖堂（14 世紀半ば）内の壁画も注目に値する。同聖堂に併設された聖デメトリオス礼拝堂には、聖デメトリオスの伝記に沿って主要なエピソードが描かれているだけでなく、蛮族からのテサロニケの防衛、そしてブルガリア王カロヤンを成敗する聖者の騎馬像の図像も残されていた。これらビザンツ起源の主題を積極的に取り入れているところを見ると、セルビアは、ビザンツに接近し、後者との連携と協調関係を顕示して、ビザンツの文化的伝統の正統な継承者という地位を標榜し、それによって隣国ブルガリアに対して優越した地位を占めようとしたと想定することも可能であろう。こうした仮はさらに吟味する余地が大きいが、こうした視点は、オスマン・トルコの征服前夜におけるビザンツ、ブルガリア、セルビア三国をめぐるバルカン地域の国際情勢を論じる際にも貴重な手掛かりを提供する可能性を秘めているように思われる。なお、今回の調査では、コソヴォ地区、プリズレンのリエヴィチ教会も、あわせて調査を行ったが、同地の聖デメトリオス伝を描いたフレスコ壁画については保存状態が完全ではなかったこともあり、十分な成果は収めることはできなかった。

次頁写真：「ブルガリア王カロヤンを斃す聖デメトリオス」、デチャニ修道院聖堂壁画（コソヴォ）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）
① Yukio Nezu, “Fall of the Last Cappadocian Hero: Revising the Complot of Nikephoros Diogenes”, in T. Masuda ed., Cappadocian Papers,Forthcoming・刊行年未定（査読有）
② 根津由喜夫「ビザンツ世界」、樺山紘一・南川高志編『グローバル世界史』、ミネルヴァ書房、刊行年未定（査読有）
③根津由喜夫「都を血で穢すのは誰か―ビザンツ中期における権力闘争の作法―」、服部良久編『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史』（ミネルヴァ書房、2015 年）第 6 章、129－149 頁（査読有）

〔学会発表〕（計　１　件）
① 根津 由喜夫　「聖デメトリオス信仰と中世後期のバルカン情勢」日本ビザンツ学会大会第 15 回大会（大阪市立大学 2017 年 3 月 28 日）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
根津　由喜夫（NEZU, Yukio）
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：５０２０２２４７

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）